
織田信奈の野望 最強の学生・相良良晴が往く！

いんてぐら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織田信奈の野望 最強の学生・相良良晴が往く！

【コード】

N8652U

【作者名】

いんてぐら

【あらすじ】

二次創作によく見られる原作主人公最強モノのハーレム系です。私の作品の良晴は原作以上にモテる予定です。ハーレム爆発の作品になると思いますが、それでもOKという方はどうぞ。ご鑑賞ください。

第一話 良晴、戦国時代に立つ！（前書き）

織田信奈は面白いです。信奈がかわいすぎる。故に私は二次創作を書きたくなりました。

マブラヴのほうを中心に投稿するため、更新はかなり緩慢になると思いますが、よろしく願います。もう少しこの作品の二次作品が増えないかなと思う、今日のこのごろ……。

第一話 良晴、戦国時代に立つ！

何気ない日常。変わらない日々。そんな時間を退屈と思っている奴は腐るほどいるだろう。

映画のような冒険を、ゲームのような非日常を、興奮に張り裂けそうなスリルを味わいたいと思う人間もいるだろう。

だが、あえて言わせて貰いたい。それは幸せだ。そんな日々を、時間を過ごせることは何より幸福なのだ。

そう。ようやく手に入れたのだ。俺こと相良良晴。高校二年生の夏に。

待ち望んだ普通の学生生活。朝起きて、二度寝して慌てて学校に駆け込んで、友達と他愛ない話で盛り上がり、放課後はクラブで青春を謳歌するなり、ノリのいい友達と町でナンパ、もしくはカラオケやボーリングするのもいい。……勉強はまあ適当に。社会で必要なのは一般常識とコミュニケーション能力、そして語学だよ。

楽しい毎日だ。俺の日常とは正反対だった。

ここには、ほぼ裸体の連中が弓やら槍やらを持ってジャングルの中を追い回したりしない！ 爆撃音や銃撃音、死の羽音、爆炎、空薬莖、死体なんてない！ ナイフ一本で無人島の中でサバイバルする必要なんてない！ そうここは天国！ 変わらない日々。おおいに結構じゃないか！

なのに今、俺の目に前に広がっている光景は、天国

いわく、どこぞの秘密組織に単独潜入し、機密情報を抜きだした、など。

いわく、謎の少佐が率いる戦闘集団を容赦なく殲滅した、など。

逸話は数々。嘘か本当か知らないけど、オレの非日常を刻みつけて来てくれたのは間違いなく母さんだった。

「くそおおお！！　母さんどこだ！？　今度はどこに俺を連

れてきやがったあああ！！」

「新手の敵だぎゃあ！！」

「討ち取れ。討ち取れ！！」

「やかましい！！」

「はぶしつ！？」

相手の槍が動く前に素早く懐に潜り込み、顎に拳を叩き込む。

もう一人の方にも同様にだ。槍の強みはその間合いの広さだが、懐に入ってしまったえばこっちのものだ。その長さが仇になる。

「こちららジャングルの原住民相手に取っ組み合いのケンカをしてんだ！　てめえらのへなちよこな槍なんぞに当たるかあ！！」

嫌な記憶が脳裏を過る。ジャングルに住むなんとかいう部族の連中は本当に恐ろしかった。あれほど乱暴だが卓越した槍の使い手はそうはいないだろう。本当、何度死にかけたことか。

正直信じられない。悪い夢としか思えないが、この気配に血の匂い。本物の戦場を知っている体が、現実だと教えてくれてやる。

「逃がすなだぎや！」

「俺は敵じゃねえよ！　ただの一般人だ！」

体力には自信がある。短距離走はクラスでは真ん中ぐらいだが、長距離走は俺の独壇場。この辺りも全て母さんのせい。

足軽達をどんどん引き離す。そしてようやく林の中に逃げ込めると思った瞬間、その林から弓矢が射かけられた。その数、およそ二〇。

「うおおおおお！？」

とっさに学生服の下に手を伸ばす。そこには十二歳の誕生日、母親から贈られた関の刀匠が造ってナイフがある。どうして武器を持っているかだって？　自分の身を守るためだよ。母さんの突然の社会見学に対応するためでもあるが。他にもこの学生服には色々仕掛けがあるが、まあそれは今度にしよう。

俺はナイフを逆手に持ち変え、ダッシュ。矢の軌道を何とか見極め、間髪避ける。これ以上の矢を射られたらかわしきれなかったな。あぶねえあぶねえ。

「かわしおっただぎやあ！？」

「まるでサルだぎやあ！」

弓兵達が弓では当てられないと判断し、俺を囲おうとぞろぞろと林から出てくる。背後から追ってくる連中の数もあわせて四〇人前後　無理。戦うなんて選択肢は最初から放棄。俺は母さんのようにナイフ一本で、歩兵の一個中隊を全滅させる変態じゃありません。

と言うわけで俺は比較的、敵がいなさそうな川の方へとは走り、水しぶきを盛大に上げて向こう岸を目指す。

「敵に背中を見せるとは、なんたる卑怯ものだぎゃあ！」

「やかましい！　命あつての物種だ！」

向こう岸にたどり着いた。やはり浅いとはいえ、水の中を走るのはかなり体力を消費する。

乱れた呼吸を無理矢理整え、視線を上げたその先　明らかに身分の高そうな侍の一団と、帷の下、椅子に優雅に腰かける女の子が飛び込んできた。

「はっ？」

戦場と言う世界の中、女の子の姿はあまりにもかけ離れているが、それ以前に目を疑ったのは側に立つ旗。丸の中に二本の線。

記憶が確かならば、駿河の大大名。海道一の弓取り、今川義元の旗印ではなかったか？　では目の前にいる黒髪に大きなくりりつとした目、そして場違いな十二単をまとった女の子があのか今川義元？

「あら、なんですよ、お前は？　奇妙な鎧を着ていますわね？」

今川義元らしき少女は扇子で口許を隠し、俺を観察してきた。

俺を目の前の光景から一度目を離し、腕を組み、唸った後尋ねた

「……ちよつと質問。君は今川義元で間違いない？」

「他に誰と申すか。雅で美しい今川義元とはわらわのことじゃ」

ふんつと偉そうに答える今川義元。

……ふざけんな。何の冗談だ？　ここが合戦場、戦国時代と言つのは百歩譲って認めてやろう。殺されかけたことも多目に見てやろう。びしょびしょになった学生服もいい。だがな……。

「だがな……何で今川義元が女の子なんだよ！？　ああつ、これは何の冗談だ！？　確かに最近、ギャルゲーあたりが歴史上の人物を女の子にして稼いではいるが、現実で見るとは思いもしなかったわ！　つーかまじ、夢ならさっさと覚めてくれえー！　！」

「な、なんですよの急に奇声を上げて！？　危険ですわ。元康さん。やっっておしまいなさいー！！」

「承知致しました」

小柄な鎧武者がこちらに走ってくる。

「はっ……」

元康？ それはつまり松平元康か？ 後の徳川幕府を作り、腹黒狸として名高いあの徳川家康か？

……こんな狸耳をつけて眼鏡して、如何にも『私、幸福じゃありません』感をバンバンに出している女の子が？

俺は口許を大きくひきつらせた。その間にも元康は日本刀を抜き、切っ先を俺に向けてきた。

「義元さまの命令で手打ちにさせていただきます〜」

何か気が抜ける。

俺は深いふか〜いたため息を漏らし、同時に肩を落とした。

「な、なんですかそのため息は〜！」

「いや、なんかもう疲れちゃってさ。いいよもう………そういう世界もあるんだって事で自己完結するからさ。オーケーオーケー……女の子武将もいていいよなうん………」

「と、とにかく手打ちにさせていただきます〜」

ぶんつと見た目とは裏腹にかなり速い一撃が、俺の首を断たんと迫る。が、うちの母さんやどこぞの武器の申し子と言われるお姉さんに比べると遅い遅い。

俺は軽く上半身をそらし、あっさりとかわした。

「あら〜？ 義元様〜、かわされました〜」

「この身のこなし、織田方が放った乱波に違いありませんわ。二の太刀、三の太刀を繰り出してやりなさいっ！」

「はい〜！ っってもう逃げちゃってます〜！」

首を義元の方に向けた瞬間、俺は全速力で駆け出した。正直行つてこんな二次元爆発な現実で死ぬのは御免だ。心のどこかで、本物の戦国武将に会えるかもしれないと言う俺の興奮を返しやがれ！

「あわわ〜！ 待つてください〜！ 私が義元様に叱られてしまいます〜！」

知・る・か！

相手が見目麗しい女性なら待つが、小娘は論外だ。十年経つてから出直してこい！

川岸に向かって水しぶきを上げて走る。元康は愛らしい声を上げながら日本刀を小枝のようにして振り回し、追いかけてくる。

驚いたな。日本刀って結構重いのに、この足の速さ。少し見直した。十年経つたら君は必ず口説こう。

川岸にたどり着いた頃に元康に追い付かれた。

「お手打ちです〜」

「ちつ……しゃーねえな！」

美女の原石を傷つける、否、女に手を上げないと言う俺のポリシー（父親仕込み）に反するが、命が掛かっているなら仕方ない。緊急避難適用だ！

「もらいました〜！」

「甘い」

日本刀が鈍い光を発し、まっすぐ降り下ろされた。俺はその一撃を逆手に構えたナイフで流そうと踏み込んだ瞬間。

「坊主。あぶないみやあ！」

突然、今川方の小柄な足軽が手早く俺を小脇に抱えて猛ダツシユ。驚いた。意外と体格がいいぞ。この人……力もある。

「待つです〜」

朗らかな笑顔で元康が追ってくるが、見る見る内に小さくなっていく。この人マジで速いな。人一人抱えてこのスピード、かなり鍛えてないか？

俺はそのまま人気のない林へと運んで貰い、下ろされた。

「ふい〜」

流石に疲れたみたいだった。汗だくの額を拭くと、大木の幹に背を付けて座り込んだ。

この猿みたいにしわくちや人が誰なのか分からないが、とにかく助けてくれたからには礼を言わねば。恩を仇で返すのはよくない。

「ありがとう。何でオレを助けてくれたんだ？」

「坊主。お前は織田方の忍びだみゃ？ あの身の一寸の見切り方……ただ者ではないみゃ」

ただ者ではない、か。いや普通の一般市民だよ。ちよつとばつかし普通の人がない経験をしているだけで……そう戦場とかジャングルとか無人島とかの……。

それにしても織田……か。と言う事はこの合戦は桶狭間の戦いか。弱小大名である織田信長が大大名今川義元を破る戦国時代を代表する戦……なんだけど、その今川義元が女の子な訳で……この分だと彼の織田信長公も女の子じゃないのかなと思うのは仕方無いよな。

「わしは今川の殿様に仕えておったが、あのお方はブサイクな男が嫌いであ。出世できそうになかったぎゃ」

だろうな。あの今川義元はそんな感じがする。オレはなるほどとばかりに頷いた。

「それでこの戦のどさくさに、織田方に寝返ろうと考えておったなあ坊主。わしを織田の殿さまに紹介してくれんか？ どうじゃ？」

「……助けてくれて申し訳ないが、俺は織田の忍びじゃないんだ。すみません」

ぺこりと頭を下げる。

「違うのきや?」

「ああ。俺は相良良晴。ただの高校生……って言っても分かんないよな……」

「孝行せえ? わしも、早く出世しておっかあに孝行してえみやあ」

「いやいや、ええと、そうだな……この時代で言うとなだの農民だよ農民」

「それは寄寓じゃ。わしも農民のせがれじゃ。じゃが、今は乱世。合戦で手柄を立てれば出世できるにやあも。わしの夢は一国一城の主になることじゃ」

くしゃつと顔を歪め、子どもの様な笑みを浮かべる。

何か凄いいい笑顔だよな。真つすぐ自分の夢を追いかけている。

「一国一城の主……」

でかい夢だ。だが、やりがいがあるだろう。この時代、身分なんて合戦でさえ手柄を立てればどうにでもなる。アメリカンドリームならぬ、戦国ドリームを実現できるだろう。

「おうよ。男としてこの世に生を受け、一国一城を望まぬ生き方などわしにはできんみゃあ! だって、お城の主となれば、女の子にモテモテだみゃあ!」

「分かるぜ！ その気持ち！」

俺は思わず足軽の手を強く握って、大きく頷いた。

女の子にモテモテ　それは男が誰もが一度は憧れ、妄想する事だ。自分の周りに常にいて、何でもしてくれる優しくてかわいい女の子達に囲まれた生活。素晴らしいじゃないかトレビアーンじゃないか！

この際細かい事は置いておこう。どうして戦国時代に居るのか、どうしてタイムスリップしてしまったのかなんてこの際無視無視。戦国ドリームを実現する機会を得たのだ。これを試さずにして男が廃る。

俺は夢を夢では終わらせない！ 夢を実現してこそ男。女を囲んでこそ男の中の勝者！

俺の言葉を聞いた足軽が破顔して、俺の手を強く握り返してきた。

「わしもそう思うみやあ！ お主、わしに匹敵する女好きだにや？」

「女を好きじゃない男がどこにいる？ 俺は草食系じゃない！肉食系だ。がぶがぶと喰う獅子だ！」

「よく分からんが、お主とても気に入っただにや！」

「よし。なら善は急げだ。おっさん、アンタの夢と俺の夢、一緒に叶えよう！ さあそれじゃあ夢の第一歩、早く織田方に行こうぜ

「！」

「おお。ありがたいにゃ坊主！ ならば、わしの弟分になれみやあ！」

「ああ！ でも一つ条件がある。アンタが大名になった暁には可愛い女の子を紹介してくれ！」

「んみや？ 紹介だけでいいのだから？ 半分くらい分けてやつてもいいだみやあ？」

「いや、いらねえ。俺は女は自分で落す主義だ。こういつちゃあなんだが、大名に寄ってくる女の半分はその金目当てだと思う。俺が囲みたいのは心底俺に惚れて、俺が惚れた女達だ！」

それこそが俺の夢。俺の思い描いていた理想郷だ！

「おみやあ……男だみやあ！！！」

がしつとオレを抱きしめる足軽。

俺の理想に共感してくれた。オレも強く抱き返した。

「おみやあほどの男みたこともないみやあ！ 約束するみやあも！」

「頼むぜオッサン！」

硬い抱擁を終え、俺達は共に西へと抜ける街道へと向かった。

俺の記憶……と言ってもゲーム知識なのだが、戦国時代の日本地図はおぼろげながら頭に入っている。今俺達がいるのはおそらく尾張と三河の国境。三河の大名である……あんまり認めたくないけど松平元康が……これもまた認めたくないけど今川義元の配下になっているから、今のところは史実通りだ。と言ふ事は西に向かえば尾張、つまり織田領だ。戦国の風雲児、先進的な考え方を持ち、有能な人材であれば身分にかかわらず抜擢していた織田信長なら、戦国ドリーム達成の大きな一歩となる。

……唯一の不安は、その織田信長が女の子の可能性があるということ。出来れば男の方がありがたいと祈りたいけど、こればかりは出たところ勝負だよな。

林を抜ける。もうすぐかなと思ひ、街道へ出た瞬間 目の前で熱い誓いを交わした足軽が胸を押さえて倒れた。

「どうした足軽のおっさん おっさん。動くな！」

直ぐに分かった。胸を両手で押さえるおっさんの指の隙間から、血が流れている。

「……流れ弾があたったみやあ……運がなかったみやあ」

全てを悟った様な顔で それは自分の死を認めた人間が浮かべる顔で おっさんは苦しそうに答えた。

「馬鹿野郎！ 夢を誓い合った仲だろう！ アンタはこんな場所で死ぬ人間じゃねえ！」

俺はおっさんを地面に寝かせ、学生服の内ポケットに忍ばせてい

る銀色のケースを取り出す。この中には注射器と数種類の薬品一式が入っている。ちなみにこれは一〇歳の誕生日に母さんから送られたものだ。母親の普通じゃない贈り物の中で、一、二を争うぐらいの使用頻度のあるアイテムの一つだ。

「おっさん。傷口を……うっ！」

赤い胸当てがさらに赤くなり、ちょうど心臓のあたりに小さな穴が空いている　駄目だ。致命傷だ。

「……坊主。わしはこれまでだみゃ。お主だけでも行けい」

「おっさん……」

かける言葉が見つからない。母さんの普通じゃない社会見学の中で何度も見てきた光景だ。

「野望に憑かれた者はいつ死ぬか分からぬ。これが戦国乱世の世の常よ……わしの相手をお主にくれてやる、一国一城モテモテの夢をお主が果たしてくれ」

「おっさん……！」

ぎゅっとその手を握りしめ、意志を受け取る。

母さんが言っていた。死んでゆく人間を看取るのは人間として当然の事。そして自分を助けてくれた者が死ぬ時、出来る事は死んでゆく人間の思いを受け取る事だけだ。

「分かったよ。おっさん。アンタの夢が受け継ごう。そ

うだ。名前は？ 俺が出世したらあつちでも一国一城の主と思われるぐらい立派な墓を建ててやるからさ！」

「……わしの名は……木下……藤吉郎……」

閉じられようとする暇。命が鼓動は弱い。もうすぐ終わりが来る。

「木下藤吉郎……分かった墓標にはちゃんと はあっ？」

木下藤吉郎……？

きのしたとうきちろう……？

ちよつと待てえー！！ 木下藤吉郎つて、後の太閤豊臣秀吉じゃねえか！？ 日本史上、いや世界史でも類を見ない大出世を果たした大英雄ではありませんか！？

「ちよつと待てストップ！ 木下藤吉郎、アンタが死ぬのはマジでまずい！ 日本の歴史がめちゃくちゃになつちまう！ アンタが織田信長に仕えなくちゃ、勝てない戦とか …！」

「……信長とは誰じゃ？ ……織田の殿さまの名は……のぶ……な……」

握りしめていた手に力を抜けた。

終わった……。

木下藤吉郎、後に羽柴秀吉、そして天下人豊臣秀吉となって豊臣政権を作り上げる筈の英雄が、名を上げず、足軽となって死んだ。

俺は藤吉郎の亡骸を傍にあつた地蔵の隣に横たえながら、傍に生えていた花を添え、静かに手を合わせた。

死者には祈りと花束を。それが残された生者の義務だ。

藤吉郎の無事な旅路を祈り、受け取った思いを果たす誓いを終え、オレはすくつと立ち上がり、これからどうするか思案した。

「これで歴史が大きく変わる……と言つが、本気でやばくないか……！？」

冷や汗が流れ出た。

だつてそうだろう。藤吉郎の働きで織田信長は窮地を脱した事だつてあつた筈だ。有名なのは墨俣一夜城とか、金ヶ崎の撤退戦とか……やばい。本気でこれはまずい！

と、その時、不意に背後に気配がした。オレは瞬間的に体を戦闘状態に移行して、振り返りながら後ろ腰に隠しているナイフを抜き、身構えた。

「そうか。木下氏が死んだか……南無阿弥陀仏、でござる」

「……これはまた典型的な……忍者ですか」

そこに立っていたのは漆黒の忍者服と鎖帷子を纏つた小柄な少女が腕を組んで立っていた。

見かけは子猫の様に華奢な体格で声も舌足らずだが……間違いな

い彼女は本物だ。気配で分かる。本物って言うのは存在が教えてくれるもんだからな。

「拙者の名は、蜂須賀五右衛門でござる。これより木下氏にかわり、ご主君におちゆかえするといたちゆ」

真紅の瞳を真つすぐ俺に向け、忍びらしい口調で言ったが……嚙んでるぞ子供忍者。でもなんだろう。何かほろっと息を漏らしたくなつた。

オレの中で彼女が癒し系に認定されたのは言うまでもない。くそっ……あと十年経っていれば口説いていたなオレ……。

「や、失敬。拙者、長台詞が苦手ゆえ」

「藤吉郎さんの友達……いや部下か？」

「相方にござる。足軽の木下氏が幹となり、忍びの拙者はその陰に控える宿り木となつて力をあわちえ、共に出世をはたちよう、そついう約束でござった」

「そうか……藤吉郎さんが言っていた相方はお前の事か」

「然り」

オレは無言で藤吉郎の亡骸に再び手を合わせる。

「藤吉郎さん。アンタの夢、しっかりオレなりの形で叶えるからな。雲の上から見ててくれ」

そして再びオレは蜂須賀五右衛門と向かい合う。

「言うまでもないでござるな？ ご主君、名をなんと申す？」

「相良良晴」

「では拙者、ただいまより郎党”川並衆”を率いて相良氏にお仕えいたす」

「ありがとう。よし、じゃあさっそく行動に移るか。さっそくだが五右衛門。現在の戦況及び主だった今川の武将の位置を調べられるか？」

「いや……相良氏。主は軍団を率いた事があるのか？ 声に張りがある。それに気配を消していなかったとはにえ、拙者の気配にいち早く気づゆき、戦闘態勢を取った」

ああ、とオレは苦笑交じりに答えた。

「いや、ねえよ。小隊ぐらいなら率いた事があるが……まあ何だ。ちよつとオレは両親が特殊な人たちでね。ガキの頃からずっと色々仕込まれたのさ」

ほんとう……色んな事を仕込んでくれたよ。特に母さんは……。

ははつとオレは遠い眼を浮かべて笑った。

「良く分からんが、何やら心強いでござるよ」

にこりと口元は頭巾で隠している為、分からないが愛らしい笑顔

だ。決めた。十年後、絶対口説くぞ！

「相良氏。髪の毛を一本いただく」

と、五右衛門がオレの髪を一本引き抜き、胸元から取り出ししてきた藁人形の中にその髪を詰め込み始めた。何だ呪うのか？ 丑の刻参りか？

「何してんの？」

「我が宿主になっていただく契約でござるよ」

「奇妙と言うか、何か物騒な契約だな」

「相良氏には、わが幹としてぜひとも出世していただく。それがきのち氏とのやくちよくであるう？」

「ああ。約束……いや、引き継いだ夢だな。見ててくれ。藤吉郎さん！」

進んでしまった針は戻せない。もはや進む事しか出来ない。

藤吉郎と言う英雄を失った織田家がこれからどうなるのか想像もつかない。

歴史は変わった。

だが同時に、オレと言うイレギュラーがこの歴史にはある。共に願った崇高で尊い夢を叶える為、オレは往くだけだ。

「相良氏。現在の戦況であるが

五右衛門の話を一一つ丁寧に頭の中に叩き込み、簡単な合戦の地図を作り上げる。情報の重要性は嫌というほど父さんに仕込まれたからな。事前に敵の戦力、陣形を知っていれば、勝率が上がる事が出来る。戦いとは準備の段階から始まっているのだ。

さて、と織田家の仕官するにしても、土産と言う名の手柄が必要だ。手っ取り早いのは武将の首を上げる事だが……殺意のない連中を殺すのは嫌だ。無論、殺意を向けてくる連中には容赦はしないが。

人は犠牲の上で成り立っている。犠牲を伴わない勝利なんてないし、何が何でも生きようとするならば、必ず何らかの代償が必要だ。

ふと、初めて人を撃った時の感覚が手に戻った。

一人一人の命を奪う重みと責任。それがどっしりと体をのしかかる。

『重いだろう？ それが人を殺すと言う事だ。その重みと責任を自覚しているならば問題ない。ここは戦場だ。銃を持つ者は撃つ覚悟もあれば、撃たれる覚悟もある人間だ』

母さんの言葉が思い浮かんだ。

そうだ。合戦場で刀を、槍を振り回し、相手を倒そうとする覚悟があるならば、その逆の覚悟も持っていなければならぬ。

「以上でござる」

「ありがとう。五右衛門。悪いけど次の頼みごとをしてもいいか

な？」

「なんなりと」

オレは藤吉郎さんの亡骸に視線を落とす。

「藤吉郎さんを埋めてやってくれ。このままだと身ぐるみ剥がされて、無残な姿を晒させちまう」

「……承知した。拙者の配下の者にやらせよう」

「それと花を添えてやってくれ。出来るだけ多くの花をな」

立派な墓は少し待ってくれよ。藤吉郎さん。

「承知した……相良氏は良い人でござるな」

五右衛門がにこりと笑って褒めてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8652u/>

織田信奈の野望 最強の学生・相良良晴が往く！

2011年7月16日02時15分発行